雪印種苗株式会社　宮崎研究農場　石井　健太郎

極早生エンバク新品種「夏疾風*」の特性と現行品種との使い分けについて

＊　品種登録出願中（出願公表中）　海外持出禁止（農林水産大臣公示有）

１．はじめに

都府県の秋・冬作牧草飼料作物としてイタリアンライグラスに次いで利用が多いのが、飼料用ムギ類です。その中でもエンバクは播種期の幅が広く、夏、秋、春のいずれの作型でも栽培可能で、比較的土壌を選ばず栽培しやすいため、根強い人気があります。エンバクの作型の中でも８月末から９月中に播種し、年内に収穫する晩夏播き栽培での作型が九州を中心に広く普及しています。晩夏播き栽培で利用する際は年内に確実に出穂に至る極早生品種の利用が求められます。

当社の極早生エンバク品種のラインナップには「スーパーハヤテ隼」（以下隼）、「ウルトラハヤテ韋駄天**」（以下韋駄天）や「スナイパー**」といった品種がありますが、今回「隼」の後継として大柄多収な新品種「夏疾風（読み：なつはやて）」を農研機構九州沖縄農業研究センターと共同で開発しました。この記事では「夏疾風」の品種特性や現行品種との使い分けなどについて報告します。

＊＊　PVP 海外持出禁止（農林水産大臣公示有）

２．品種特性

（１）草姿

「夏疾風」は大柄で非常に見栄えに優れる草姿であり、草丈が150cmを超える年もあります。茎葉ボリュームに優れ、茎も太いためがっしりとした印象を受けます（**写真１**）。

（２）出穂期

前述した通り、晩夏播きで用いる極早生品種は安定して年内出穂する必要があります。極早生品種の中でも出穂期には幅があり、当社の品種では「スナイパー」が最も出穂が早く、そこから１週間ほど遅れて「夏疾風」や「韋駄天」が出穂します。出穂が早いことは利点ではありますが、播種期や気象条件によっては短稈のままで出穂が始まってしまい、低収となる恐れがあります。「夏疾風」は適期の播種で安定して年内出穂し、十分な収量が確保できる出穂の早さと収量性のバランスがとれた利用しやすい熟期の品種です。

写真１　夏疾風の草姿
※当社宮崎研究農場（2021年12月６日撮影）

（３）耐倒伏性

一般的に草丈が高く、茎葉ボリュームのある品種は耐倒伏性に劣る傾向がありますが、「夏疾風」は稈が丈夫で耐倒伏性に優れる品種です（**写真２、表**

写真２　耐倒伏性の比較
※当社宮崎研究農場（2020年２月４日撮影）
写真右側が「夏疾風」、左側が「他品種」

表１　倒伏程度の比較

品　種	倒伏程度	
	9 /22播種（晩夏播き）	
	2021/11/ 6 の大雨により発生	2021/11/22の大雨により発生
夏疾風	**1. 3**	**3. 5**
スーパーハヤテ隼（品種　隼）	3. 8	4. 5
他品種A	4. 0	7. 3

※９（甚大）～１（無）（当社宮崎研究農場 2021年）

１）。ただし、エンバクは刈取りが遅れると倒伏しやすいので、遅くとも糊熟期までには刈取りを行うようにしましょう。

（４）耐寒性

エンバクは他のムギ類と比べると耐寒性は低いため、秋播きした際に冬枯れが起きる場合があります。冬枯れは、播種が早すぎることによる秋の育ちすぎで生じる場合や、窪地や低地、排水不良により水がたまりやすい草地で生じる場合が多いです。冬枯れを回避するためには適期播種と耐寒性に優れる品種の利用を心がけましょう。「夏疾風」は耐寒性に優れる品種ではないため、秋播きで冬枯れが心配される地域で栽培される場合は、極早生エンバクの中でも特に耐寒性に優れる「韋駄天」をご利用ください。

（５）収量性

当社宮崎研究農場及び千葉研究農場における晩夏播き乾物収量の３か年平均値（2019-2021年）を**図１**に示しました。「夏疾風」の乾物収量は「隼」との比較で宮崎研究農場は並み、千葉研究農場では多収。「韋駄天」との比較では宮崎研究農場はやや低収、千葉研究農場では多収という結果が出ています。

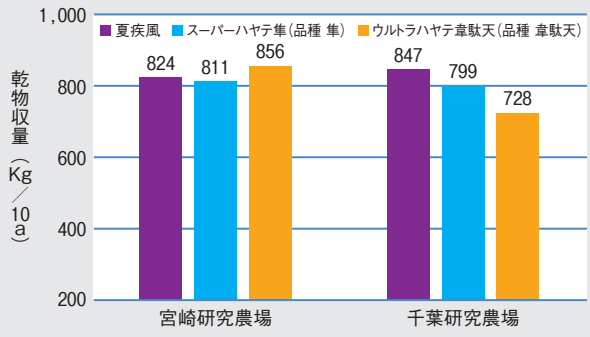

図１　乾物収量成績　2019-2021年晩夏播き平均

３．栽培方法

（１）作付体系と推奨品種

①晩夏播き

一般地では８月下旬～９月中旬、西南暖地では９月上旬～９月下旬に播種を行い、年内に収穫する作付体系とします。「夏疾風」は晩夏播きで特に草丈が伸び、多収となる品種ですのでこの作付体系での利用をおすすめします。晩夏播きは標準の播種期より播種が早くなると短稈出穂して収量減となり、遅くなると未出穂となって乾物率低下と収量減を引き起こします。前作との兼ね合いでどうしても播種が遅れて年内に出穂しない可能性がある場合は、極早生エンバクの中でも出穂の早い「スナイパー」をご利用ください。

②秋播き

一般地では10月中旬～11月上旬、西南暖地では11月上旬～11月下旬に播種を行い、越冬させて翌春に収穫する作付体系とします。秋播きは最も収量が見込めますが、前述した通り寒害による冬枯れを引き起こす場合があります。秋播きで極早生エンバクを作付けされる際は耐寒性に優れる「韋駄天」をおすすめします。なお寒冷地や積雪地帯ではエンバクの越冬利用はできませんので、耐寒性、耐雪性に優れるライムギの利用をおすすめします。

③春播き

一般地では３月中旬～４月上旬、西南暖地では３月上旬～３月下旬に播種を行い、初夏に収穫する作付体系とします。春播きは草丈が低くなり低収となる場合が多いため、播種量を増やして増収を狙いましょう。また、この作期は気候も温暖で雑草と競合するので初期生育に優れる「夏疾風」の作付をおすすめします。

（２）混播利用

エンバクは他の草種と混播することで様々なメリットがあります。代表的な例としてイタリアンライグラスとの混播栽培が挙げられます（**写真３**）。晩夏播きでの混播栽培は９月中旬～下旬頃（西南暖地）に極早生エンバクとイタリアンライグラスを播種し、年内にエンバクをメインで収穫、春にイタリアンライグラスの再生草を収穫します。この作型は一度の播種で収穫が複数回できる省力的な栽培方法であり、年内のエンバクの収穫に加えて春にイタリアンライグラスが収穫できるため、増収が見込めます。注意点として夏場にイタリアンライグラスを播

写真３　エンバクとイタリアンライグラスの混播
※当社宮崎研究農場（2022年４月６日撮影）

種するといもち病が発生する確率が高くなるため、抵抗性品種の利用をおすすめします。イタリアンライグラスとの混播は秋播きでも利用されており、耐寒性が優れるムギ類と混播することでイタリアンライグラスの播種適期を逃した際の冬枯れ予防対策になります。混播のメリットは他にもあり、倒伏軽減効果や水田裏作などでの湿害・減収対策など多岐にわたります。ムギ類とイタリアンライグラスをうまく組み合わせて安定した自給飼料生産を目指しましょう。

４．おわりに

本稿では極早生エンバク新品種「夏疾風」について特性や利用方法を報告しました。「夏疾風」は見栄えに優れ、耐倒伏性も改善された利用しやすいエンバクです。これから晩夏播きエンバクの作付時期が始まりますが、ぜひ「夏疾風」の利用をご検討ください。

当社は、今回報告した品種以外にも様々なムギ類の品種を販売しております。品種の詳細については既刊の牧草と園芸の報告をご覧ください（牧草と園芸　第71巻第４号2023年　p11-16　晩夏播きから春播きまで利用可能なイタリアンライグラスおよびムギ類の紹介）。その他不明な点などございましたらお気軽に最寄りの当社営業所または研究農場までお問い合わせください。